

(釈迦涅槃図)

日々好日

弘法大師の言葉



日々好日

(令和六年二月発行)

風もなく東の空にお月さまが清らかに輝く大晦日、除夜の鐘を撞いて迎えた甲辰のお正月。

国民の誰もが新たに迎えた年が良い年でありませうに神仏に祈り願われたことでありませう。その良い年というのは大願成就もあるでしょうが、家族の息災安穩に加えて世界平和であったことでしょう。

こうして、初詣の人々と穏やかなお正月を喜びあったのもつかの間、夕刻には能登半島でM7.6、震度7の地震が発生。津波もあり山は崩れ火災も発生して町は一変し、多くの死者行方不明者が出ました。数日が経つても被害の全容は定かではない大地震である。

雪国でもあり被災者の生活が心配なことです。こうした悪夢のような現実を目にしながらもなす術もなく、御経を口ずさむだけの無力感に苛まれる老骨ここにあり。

南無佛 南無佛 南無佛。

弘法大師のお言葉

「その道の依倚なり。その風は髣髴たり。妙道鑽りがたく、軽毛風に随う。これすなわち蒼天西に傾く、群星何んぞ東せん。黄輿震裂す」 (秘蔵寶輪巻中)

(仏の教えを習い、その風に接するもぼんやりして、道に徹することが出来ない。妙なる教えの心髄をつかむことは難しい。

軽い毛髪が風になびくが如くであり、天は西に傾き、群星は東に走り、天地は震え裂ける。

龍

# 涅槃會

「涅槃とは貪欲永く尽き、瞋恚永く尽き、愚痴永く尽き、一切の諸煩惱永く尽く。是を涅槃と名付く」(維阿含經)

二月十五日はお釈迦さまが涅槃に入られた日です。それは生身の釈迦が死んで永遠のほとけに生まれ変わられたということですが。

この永遠なる涅槃の特性として涅槃の四徳「常樂我淨」が説かれます。

常…常住ということ、死んだり生まれたりしない。

樂…安樂ということで、生死などの苦しみが無いこと。

我…迷う自我はなく、仏性を悟った自在な我。

淨…心の穢れがなく、行いに不正がない清浄なこと。

高野山では涅槃会と言わず常樂会と呼び二月十四日の深夜から十五日の昼まで総本山金剛峯寺で一山の住侶が参集して明恵上人作の四座講式を唱えて厳かに営まれています。

当山のそれは地元岩国の画家、芦野文亀の描いた涅槃図を掲げて営んでいます。小幅ながら良く描かれています。

芦野家は代々今津に在住するも文亀の時、一時海土路に移り住み明治十三年八月には廃寺後、再興されたばかりの龍門寺の茅葺の本堂の天井に雨を禱って雲龍を墨書きしています。

しかし残念なことに昭和十六年十月一日に豪雨で被災し、堂宇とともに滅失しています。尚、吉香公園の絵馬堂に文亀の描いた鍾馗の画が現存しています。

涅槃図には釈迦の死を悲しむ諸弟子・菩薩・在俗の

人・天女そして幾多の禽獣が描かれています。それは釈尊の慈愛に浴した者たちの多さを表しているともいえます。しかし描かれている禽獣の多いほど後世の作だとされる。

我国で最古とされるのは応徳三年(一〇八六)の年号が書かれている高野山の涅槃図で唯一国宝に指定されています。それはわずか獅子が一頭いるのみです。

その涅槃図の大きな写真を額装して常時納骨堂の弥勒菩薩像の前に立てかけ、毎朝拝んで諸霊の供養をさせていただいています。

そしてそれは私自身の終活という一面があり、死と向き合うという日は一日が得難い一日であるということをお伝えられ、充実した一日を過ごさせていただく機縁ともなっています。

また、弥勒菩薩はお釈迦様の遺骨である仏舍利を納めた五輪の舍利塔を手におられるのは釈尊の継嗣であることを教えています。

お釈迦様のように多くの縁ある者たちに囲まれ見守られて、仏の国への旅立ちには誰も願いません。

釈尊は自らの死期が迫っているなかでも教化を続けられ法を説いておられます。

それは仏亡きあとの遺されたものたちへの気遣いや教戒である。

ここで仏垂般涅槃略説教誡經の中から教誡



の幾つかを挙げてみました。

五根は心を其の主と為す。是の故に汝らまさに好く心を制すべし。心の畏るべきは毒蛇、悪獸、怨賊よりも甚し。心を縦にすれば人の善事を喪う。

飲食を受けることはまさに薬を服するが如くすべし。わずかに身を支えるを得て、もって飢渴を除け。蜂の華を採るにただ、其の味のみを取って色香を損せざるがごとし。

煩惱の毒蛇、睡って汝が心に在り。持戒の鉤をもつて之を摒除すべし

瞋心は猛火よりも甚し、常に防護して入るを得せしむること無かるべし。

色欲の人は利を求むること亦多いが故に苦惱も亦多し。小欲の人は求むること無くば即ち此の患い無し。

お釈迦様が涅槃に入られる直接のきっかけは生まれ故郷に帰りたいと北への旅を続けておられ、その途次鍛冶工の子、純陀は釈尊の説法を聞いて感激し食事を供養したのでした。それはキノコ料理であったという。

それを食べられて腹痛をおこされ樹下で休息されるようになり、一気に体調を崩されたのです。

阿難をはじめお供の者は心配するのです。それを察して釈尊は告げられました。

「阿難よ、純陀の供養は、成道の折のスジャータの供養し



た乳糜と同様にその功德は大きいと純陀に告げよ」と。

釈尊の慈愛に満ちたお心が窺えます。

涅槃図ではこの純陀が阿難と向き合うように地に臥して泣いています。純陀の描かれない涅槃図もあるという。

(写真二面は当山の涅槃図より)

涅槃図の真上には満月が画かれています。これは釈尊のお涅槃が十五日であることを示していますが、それは当然のことながら旧暦であることを知らなければなりません。

このことについて大般涅槃經に要約すると次のように説かれています。

「十五日の月は満々として少しも欠けたることもないように釈尊の涅槃も少しの欠減のないことを表すために十五日を選んだのである」と。

釈尊の涅槃の齡を過ぎていますが、悟りの境地には遠いものの折あるごとに仏の教えを説き続けたい。

死力を尽くされた釈尊の最期の旅蔭の如くに。



## 当山の天神画について

「正月かけ」と墨書された古紙に包まれた木箱入りの天神様の軸物があります。その箱には武田楊岸筆とあり、軸の裏面には天保二年、三十七才之画とあります。天保二年は一八三一年ですから今から一九三年前に画かれたものだとわかります。

武田楊岸も岩国の人で名を信恭、風清堂と号していた。岩国鉄砲組に属していた。画は内田耕月に学んだ。後に京都に移住し画法を変えたという。元治元年に七十七才で没。



この天神画像をなぜ正月用と言うのか定かではありませんが、歳末の二十五日から床の間に掲げて正月を迎えることが、この寺の慣例であると先代から聞かされてきました。

しかし、通津に移転する以前から歳徳神の軸物を買って求めて正月に本堂にお祀りし初詣の人に拝んでいただいております。

天神画は千支の守り本尊などともに正月にお祀りはするものの慣習としてのお祀りは怠っていたくらいがありました。

歳末に福岡篠栗霊場の龍泉堂主・木山亮昭師より「菅公の酒」という大宰府天神社ゆかりの清酒を御供えいた

だいて、旧習を思い出してお祀りしたのが左の写真です。

天神イコール菅原道真ではなく、太閤の秀吉、黄門の光圀に類するもので、天神は菅公の霊にノキサキを貸して母屋を取られたというようなことのようなのである。

讒言により大宰府に左遷され不遇のうちに世を去った道真公の霊が雷神などを駆使してよからぬことをした人々にたたる。菅公はこわい神だといところから始まった天神信仰であるとされる。

それは公の他界から半世紀を待たずに成立したとみられる。信仰の対象とみられる神像が画かれた上限は「北野天神縁起絵巻」の詞書や藤原定家の「明月記」に示された十三世紀であろうとされる。その遺例はさらに百余年を経た南北朝のものが多いという。

当山のそれははるか後の江戸末期のものですが、地元岩国の絵師の作であることは貴重である。

また一口に天神画と言っても一様ではなく、当初は怒りの表情で繩坐に坐したもので、白髪姿、束帯を付けて立つ姿、口から火を吐くものまであったという。

時代が下がるにつれて学問の神、詩歌・書の神としての姿が定着したと考えられる。それは上畳に坐す威厳のあるなかでも温容をたたえるものとなった。当山の画もそれに連なるものであることは一目瞭然である。



それではなぜ、その天神画が当山に存し正月掛けとされるようになったかは先代よりも聞いたことはありません。聞いたかも知れないが、正月は年神様（歳徳神）だとして記憶しなかったのかもしれない。若かりし頃の不遜を後悔しなくてはならない。

佛教では大師の時代から本地垂迹という信仰があつて、天神の本地仏は観音が当てられたという。それは菅公の在世中の観音信仰があり、没後その遺体が観音を本尊とする寺に葬られたことによるのでないかともいわれている。

とすると、旧藩時代の当山には観音像はありませんから天神とのつながりはないこととなります。しかし、先代が晋住後、数年で寺は被災し、戦後移り住んだ尾津の観音堂で本尊が千手観音であつたことで、櫃底にあつた天神画を思い出して祀り、寺の復興を観音に祈り天神に願いを託したのではないかと想像を逞しくします。

これは想像の域を出ませんが、先代の意が本地垂迹にあつたかどうかは別に、江戸末期からの習慣であつたかどうかは、今にしては知る由もありません。

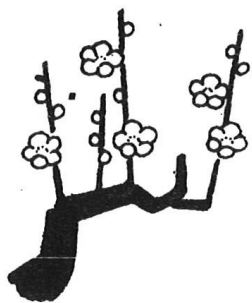
先代が尾津の地で数十年間、天神画を歳末に掛けて正月を迎えていたことはこの目で確かかなことですので、先代の思いの程を引き継ぐのは自然の成り行きです。

それが、菅公の酒によつてなされ、約二百年前の天神画が再登場することになつたことを喜びたい。

その画幅には二本の紅梅の古木が画かれています。

亡き母の名が梅子であり、梅花咲く季節の話題の一つともなりえよう。

境内の紅梅の幼木もつばみを膨らませている。



### 御歳暮・御年賀等浄財拝受者芳名

葛谷文字殿・河中京子殿・吉岡琴路殿・渡部富士恵殿  
石井靖夫殿・福島和美殿・三代博幸殿・末本ひろ子殿  
植月 守殿・竹本幸生殿・村本博人殿・土井恵美子殿  
和八孝男殿・若林康一殿・中岡大輔殿・江野尻祥子殿  
吉岡 茂殿・西岡 一殿・中原六男殿・土井ゆみ子殿  
高石正喜殿・中川賢次殿・石井 誠殿・矢野 峰子殿  
弘津善通殿・富岡和子殿・竹原茂子殿・藤重 和子殿  
杉本俊美殿・堀内春男殿・市岡一雄殿・末岡 政子殿  
阿部一喜殿・木邊聖子殿・坂本美重殿・歌川 栄子殿  
大西仁子殿・河村浩児殿・太田信幸殿・久保田恵美子殿

(順不同)

御芳志ありがとうございます。境内の鬼門に鎮守堂の小堂を建てたいと昨年来計画しています。頂戴した浄財をその建築費の一部に充当させていただきたいと考えています。

新年早々、大地震があり信じられない航空機事故もありました。加えて小倉では大火災も発生しています。

このような事態を考慮に入れるまでもなく、檀信徒の貴い浄財をもつて移転事業が成満し、これを日々護持することに意をそそいでいますが、更なる神仏の加護があれば心強いということでもあります。



### 高野山奥之院弘法大師御廟前奉納御写経 六三八

二卷奉納 岩国市装束町四丁目 福島 松代殿  
二卷奉納 岩国市南岩国町二丁目 沖本あつ子殿  
一卷奉納 岩国市通津 吉岡 律子殿

(十二月十一日～一月十日奉納分)

凶貪れば身を喪うに至る

その昔、ある処に仏法僧に帰命して戒を護る賢い一人の青年がいました。

その青年は伯父と二人で諸国を行商しておりました。ある時、国境の河を伯父は一人で先に渡り対岸の町に入りました。その町に童女と暮らす一人の母親がいました。伯父はその家に目を止め、何か売りたいものは無いかと声をかけました。

母親は言いました。

「そこに澡盤（口を漱ぎ手を洗う器）あり、それを買って欲しい」と。

伯父はそれを一目見てかなりの値打ちものだと思いましたが、安く買うべく小刀をもつてその器を摩つて言いました。

「つまらぬ物だ、わが手を汚してしまった」と言い残して家を出ていきました。

母親はおおいに恥じたことでした。

暫くの後、青年がやってきたのです。母親はその青年を見て、「仁人の相あり、欲深き人ではない」と察して先の澡盤を差し出して「買って欲しい」と言つたのです。青年はそれを一目見て「これはすばらしい一品だ。紫磨の黄金なり。私の持っているお金では買えるものではない」と。

それを聞いて母親は言いました。

「貴男の持つておられる金銭で結構です」と。

青年は喜んで持つてる金銭をすべて差し出して言いました

「すべて差し上げたいが帰りの河の渡し賃を頂けないで

しようか」と。

母親は、渡し賃を無心するなど穢れのない好ましい青年だと感心してその金銭を差し出すのでした。

こうして青年は得難い珍品を手にして足取りも軽やかに来た道を帰っていきました。

それから程なくして伯父は頃合いも良からうと再び母親の家にやってきたのです。

そして言いました。

「貧しくお困りの様だから少しばかりの金銭を差し上げよう。あの澡盤を持つてきなさい」と。

母親はこれ聞いて言いました。

「貴男が帰つた後、好青年が来られ、あの澡盤を一目見るなり。「良い品なり」と言つて持ち金すべて差し出されました。私は嬉しくなつて即座に彼の器をその青年に与えました。帰りに船賃を所望するなど健気な好青年でしたよ」と。

伯父はそれが甥であることがすぐにわかりました。伯父はこの家にはまだ何か珍品があるはずだと思ひ言いました。

「あの澡盤のほかにもまだ何かあるだろう。今度は高く買ってあげよう。持つてくるがいい」と。

母親は言いました。

「貴男に買ってもらいたいものは何一つありません。早くお帰り下さい」と。

伯父は自分の目論見が外れたことが悔しく、甥を追いかけるのですが、気も動転して足元がふらつき大地に倒れ、打ち所が悪く息絶えたという。



## あとがき

この寺報が今月で六六〇号となりました。それは五十五年が経過したことになります。

印刷機器は性能が良くなっている反面で、肝腎の頭は老化の一途で毎号誤字脱字や変換ミスなどが絶えません。そんな寺報ですが先月号よりホームページでも見て頂けるようになりました。パソコンはもとよりスマホでも「岩国 龍門寺」で見られます。遠隔のご家族などにも知らせて頂くと有難いことです。呆けてはいられません。能登地震の翌日には羽田空港で、日本航空のエアバスと海上保安庁の航空機が滑走路上で衝突するという信じられない事故が発生し、海上保安機の乗員五人が亡くなられたものの、日航機では八人の子どもを含む乗客乗員三七九人全員が煙がたちこめる機内から脱出できたのは奇跡的なことで、客室乗務員の適切な判断行動が称賛されています。平素の訓練のたまものでありましょう。事故原因は明らかに人為ミスである。私たちも目も耳も脳も老いては劣化の一途です。不確かなことは何度も聞き返して意思の疎通を図りましょう。後悔するような事態をもたらすことのないように。これは新年初頭の恐ろしいばかりの教訓である。

発行者

高野山真言宗

寶池山

龍門寺

吉岡

光昭



クシナガラ

沙羅の林に

横たわる

釈迦牟尼仏は

永遠のほとけに

岩国市通津 3634 番地 3

☎740-0044

高野山真言宗

寶池山 龍門寺 発行

☎岩国 (0827) 38-4611 番